

# 「培ってきた経験を『援助の総合デパート』JICAで生かしたい」

2006年9月にJICA国際協力専門員となった相賀裕嗣さんは、青年海外協力隊への参加をきっかけに、さまざまな形で国際協力にかかわってきた。援助の現場とアカデミックな世界とを行き来する相賀さんの向上心を支えているものとは。



photo by Asada Yuki

## WFPの緊急ニーズアセスメントをリード

JICAには現在、約1000人の国際協力専門員があり、専門性を生かして国内外のJICA事業へ技術的なアドバイスを行っている。その一人、2006年9月に着任したばかりの相賀裕嗣さんの前職は、国連世界食糧計画(WFP)の上級プログラムアドバイザーだ。

地の人々に緊急の食糧援助を実施することだ。そのためには、「何人の人々が、どのような食料をどのくらいの量だけ、何カ月間必要としているか」を導き出すための調査、「緊急ニーズアセスメント」が不可欠となる。相賀さんが担っていたのはまさにこれだ。ローマにある本部から被災地を抱える国事務所などに技術的な助言をし、アセスメント手法の開発も行っていた。大規模な緊急時には現場へ赴き、ほかの国際機関などとの合同調査で、1000人に及ぶアセスメントチームの指揮を執ることもあった。

手法に基づいた客観的な調査を行っているんです」

WFPが実施するアセスメントは、災害発生直後2〜3日以内にを行う暫定的な調査と、その後2〜4週間かけて比較的じっくり行う調査、長期化する災害や食料不足に対して6週間ほどかけて行う調査の3タイプがある。WFPのすべての緊急援助はこれらのアセスメントの結果に基づいて計画され、実行に移される。

緊急事態に陥った地でのアセスメントは、なかなか思いどおりにはいかない。

「ダルフールでは、飢餓状態の地区もあるので、ドナーから資金を早急に調達するために、われわれアセスメントチームはしっかりとした調査を早くやりた。だが一方で、食料の配給担当が『早く食料をあげなきゃ、さらなる犠牲者が出てしまつ』と言つてヘリの取り合いになる。準備してきたことが調査当日になつてパーになることも多く、いろいろな場面できりぎりの難しい判断を強いられました。04年と05年に、国連食糧農業機関、国連児童基金、米国疾病予防センターとともにスーダンで実施

した合同アセスメントを振り返つてこう語る。

「緊急事態では人の移動が激しいので、既存のデータを分析するのは意味がない。だから、避難民などからの聴き取りやデータ分析はすべて自分たちでやります。ドナーには現場の状況を生言葉で説明しなければいけないので、他人に任せたら分りませんというわけにはいきません」

スーダンでの仕事は高く評価されたが、自身は本当に最善を尽くせたのか、今でも分らないことが多いという。

## 国際協力人生の原点となったリベリアでの活動

相賀さんが国際協力の世界に足を踏み入れたのは、1988年のこと。青年海外協力隊員としてリベリアで活動したのがきっかけだ。それまでは都立高校の教員として、日本の子どもたちと向き合ってきた。

「あのころは、国際的なことといえば生徒の中に中国からの引き揚げ子女がいたくらいで、国際協力については考えもしなかった。しかし、日常業務に追わ



2004年、スーダン・ダルフールの国内避難民に対する聴き取り調査。統計学的手法に基づくアセスメントにより、WFPの緊急食糧援助の内容が決まる

「WFPはトラックや飛行機で食料を大量にばらまいているようだが、それはきちんとニーズを調査した結果なのか?」と問われることがありますが、統計学的

「緊急事態では人の移動が激しいので、既存のデータを分析するのは意味がない。だから、避難民などからの聴き取りやデータ分析はすべて自分たちでやります。ドナーには現場の状況を生言葉で説明しなければいけないので、他人に任せたら分りませんというわけにはいきません」

「あのころは、国際的なことといえば生徒の中に中国からの引き揚げ子女がいたくらいで、国際協力については考えもしなかった。しかし、日常業務に追わ

ここでいう緊急ニーズアセスメントは、食糧安全保障のニーズアセスメントを指す。



Aiga Hirotosugu

JICA国際協力専門員

# 相賀 裕嗣

挑戦者たち  
Stories of  
Challengers  
Vol.16



1989年、リベリアにて。教員養成校の学生たちと

厳しい生活環境の中にあっても、学生たちの熱意が伝わってくる仕事にやりがいを感じていたが、派遣期間を半年残したまま帰国を余儀なくされた。内戦が勃発したのだ。「2年の任期を全うできなかったことが悔しくて。帰国後、いったんは高校教員に復職したが、この満たされ

ない気持ちで相賀さんを本格的に国際協力の道へと導くことになった。

転換の理由を、「協力隊員のころ、周りの人たちが簡単に死んでいくような気がしたんです。教育やほかのことも大事ですが、それどころじゃなくなって、当時は思ってたんでしょね」と語る。

修士号取得後は、国際赤十字赤新月社連盟(IFRC)の地域救済事務官として、カザフスタンと極東ロシアに半年ずつ駐在し、ソ連崩壊後の混乱状態にある人々に、医薬品や粉ミルクを緊急配給するプログラムに携わった。この仕事は、プログラム終了とともに雇用も終わる。

次に就いたのは、日本の政府開発援助(ODA)の仕事だった。開発コンサルタントとしてODA事業を受注し、各地の途上国へ赴いて調査活動や技術移転をする。その間、JICA専門家として3年間カーナへ派遣されたこともあった。

来て悪循環に陥る日々をリセットしたい、どこか知らない世界に飛び出したいという思いが膨らみ、初めての海外へと飛び立った。

派遣されたのは、首都モンロビアから300キロほど離れた小さな町にある教員養成校。相賀さんが黒板に書くことが、学生たちにとって唯一の教科書だった。「今、聞き逃したら二度とチャンスはないから、学生たちは一生懸命でした。眠くなる」と立ち上がって自分のほおをパシッとたたいたり、隣の学生にたたいてくれと頼んだり。

### 専攻を国際保健に変えて

2年後の夏、相賀さんはフィリピンにいた。教職を辞めて大学院へ進み、国際保健という分野で新たなスタートを切った彼は、世界保健機関のリサーチ・アシスタントとしてマニラの地域事務局に勤める傍ら、スラムで下痢症と水に関する疫学調査をしていた。保健分野への方向

転換の理由を、「協力隊員のころ、周りの人たちが簡単に死んでいくような気がしたんです。教育やほかのことも大事ですが、それどころじゃなくなって、当時は思ってたんでしょね」と語る。



1993年、高校教員を辞め、大学院で国際保健を専攻していたころ。マニラのスラムで小児下痢症と安全な水へのアクセスの疫学調査をした

### 国際協力の中の対比軸



1994年、ウズベキスタンの病院で。IFRCの中央アジア4カ国に対する28億円に上るプログラムの現場を一人で受け持った

これまで、さまざまな立場で国際協力に取り組んできたが、その中には多くの対比軸があるという。先進国と途上国の対比や格差はもとより、案件を発注する側のJICAに対して、受注する側の開発コンサルタント。二国間援助と多国間援助。JICAが主とする開発援助とIFRCやWFPが主とする緊急援助。さらに、現場で実務を行う世界と研究室のアカデミックな世界。

「さまざまな対比やギャップが」

マルチセクトラルなプログラムができるのではないかと。そう思うとき、これまでの経験やそこで得た知識を役立てられるかもしれないと思っ



1997年、JICA専門家を務めたガーナで。相賀さんのひざに座っているのは長男の拓くん。右側は夫人の美津枝さん

## 自分にサクセスストーリーはない。「こんちくしょう」という気持ちで次の段階に進めてきた

### 日本人に、もっと緊急ニーズアセスメントを知ってほしい

栄養失調と聞くと、私たちは食料が不足しているのではないかと考えるが、そうとは限らないと相賀さんは言う。

「栄養失調には、食べ物だけでなく、水やトイレに問題がある、調理方法がよくない、という3つの主な原因があります。ある地域で栄養失調率が30%以上に達したとき、『WFPはなぜ行かないんだ』と問われたことがあります。データを分析したら、実は食料不足よりも、むしろ水の質やアクセスに問題があったことが分かったのです」と、アセスメントの重要性を指摘する。

相賀さんはこの分野にかかわる日本人がほとんどいないことに危機感を隠さない。「日本政府はWFPの主要な理事国でありドナーの一つですが、アセスメント分野での人的貢献にも期待しています。例えば、アセスメント手法を標準化するための会合の参加者は、欧米、つまり「コムギ文化」の人がほとんどです。援助を必要とする地域には「コメ文化」の国も多いですから、コムギ文化に偏らないアセスメント手法の国際標準を作るためにも、日本人にもっと関心を持ってほしい。」

食糧援助のプログラミングの基礎となるアセスメントでは、被災地の食料市場へのダメージ、受益者の援助依存、農民や漁民の労働意欲低下などを、食糧援助が誘発しないよう考慮する必要がある。「このようなきめ細かい仕事は、日本人は得意でしょうから、ぜひ注目してほしいですね。」